

雪の女王

SNEDRONNINGEN

ハンス・クリステイアン・アンデルセン

Hans

楠山正雄訳



第一のお話

鏡とそのかけらのこと

雪の女王 SNEDRONNINGEN



さあ、きいていらつしやい。はじめますよ。このお話をおしまいまでできくと、だんだんなにかがはつきりしてきて、つまり、それがわるい魔法使まほうつかいのお話であつたことがわかるのです。この魔法使というのは、なかまでもいちばんいけないやつで、それこそまがいなしの「悪魔あくま」でした。

さて、ある日のこと、この悪魔は、たいそうなごきげんでした。というわけは、それは、鏡をいちめん作りあげたからでしたが、その鏡というのが、どんなけつこうなうつくしいものでも、それにうつると、ほとんどないもどろげんに、ちぢこまつてしまうかわり、くだらない、みつともないようすのものにかぎつて、よけいはつきりと、いかにもにくしくうつるといふ、ふしぎなせいしつをもつたものでした。どんなうつくしいけしきも、この鏡にうつすと、煮にくたたらしたほうれんそうのよ

うに見え、どんなにりっぱなひとたちも、いやなかつこうになるか、どうたいのない、あたまだけで、さかだちするかしました。顔は見ちがえるほどゆがんでしまい、たった、ひとつぼちのそばかすでも、鼻や口いっぱい大きくひろがつて、うつりました。

「こりやおもしろいな。」と、その悪魔はいいました。ここに、たれかが、やさしい、つつましい心をおこしますと、それが鏡には、しかめつつらにうつるので、この魔法使の悪魔は、じぶんながら、こいつはうまい発明はつめいだわいと、ついわらいださずには、いられませんでした。

この悪魔は、魔法学校をひらいていましたが、そこにかよっている魔生徒どもは、こんどふしぎなものがあらわれたと、ほうぼうふれまわりました。

さて、この鏡ができたので、はじめて世界や人間のほんとうのすがたがわかるのだと、このれんじゆうはふいちようしてあるきました。で、ほうぼうへその鏡をもちまわったものですから、とうとうおしまいには、どこの国でも、どの人でも、その鏡にめいめいの、ゆがんだすがたをみないものは、なくなつてしまいました。こうなると、凶にのつた悪魔の子どもは、天までも昇のぼつていつて、天使てんしたちや神さままで、わらいぐさにしようとおもいました。ところで、高く高くのぼつて行けば、行くほど、その鏡はよけいひどく、しかめつつらをするので、さすがの悪魔も、おかしくて、もつていられなくなりました。でもかまわず、高く高くとのぼつていつて、もう神さまや天使のおすまい住居に近くなりました。すると、鏡はあいかわらず、しかめつつらしながら、はげしくぶるぶるふるえだしたものですから、

ついに悪魔どもの手から、地の上へおちて、何千万、何億万、というのではたりない、たいへんな数に、こまかくくだけて、とんでしまいました。ところが、これがため、よけい下界げかいのわざわいになったというわけは、鏡のかけらは、せいぜい砂つぶくらいのの大ききしかないのが、世界じゅうにとびちつてしまったからで、これが人の目にはいると、そのままそこにこびりついてしまいました。すると、その人たちは、なんでも物をまちがつてみたり、ものごとのわるいほうだけをみるようになりました。それは、そのかけらが、どんなちいさなものでも、鏡がもつていたふしぎな力を、そのまま、まだのこしてもつていたからです。なかにはまた、人のしんぞうにはいったものがあつて、そのしんぞうを、氷のかけらのように、つめたいものにしてしまいました。そのうちいくまいか大きなかけらもあつて、窓ガラスに

使われるほどでしたが、そんな窓ガラスのうちから、お友だちをのぞいてみようとしても、まるでだめでした。ほかのかけらで、めがねに用いられたものもありましたが、このめがねをかけて、物を正しく、まちがいのないように見ようとすると、とんださわぎがおこりました。悪魔はこんなことを、たいへんおもしろがつて、おなかをゆすぶつて、くすぐったがつて、わらいました。ところで、ほかにもまだ、こまかいかけらは、空のなかにただよっていました。さあ、これからがお話なのですよ。

第二のお話

男の子と女の子

雪の女王 SNEDRONNINGEN



たくさんの家がたてこんで、おおぜい人がすんでいる大きな町では、たれでも、庭にするだけの、あき地をもつわけにはいきませんでした。ですから、たいてい、植木うえきばちの花をみて、まんぞくしなければなりませんでした。

そういう町に、ふたりのまずしいこどもがすんでいて、植木ばかりよりもいくらか大きな花ぞのをもっていました。そのふたりのこどもは、にいさんでも妹でもありませんでしたが、まるでほんとうのきょうだいのように、仲よくしていました。そのこどもたちの両親は、おむこうどうしで、その住んでいる屋根うらべやは、二軒の家の屋根と屋根とがくつついた所に、むかいあっていました。そのしきりの所には、一本の雨どい、がとおつていて、両方から、ひとつずつ、ちいさな窓が、のぞいていました。で、といをひとまたぎしさえすれば、こちらの窓からむ

この窓へいけました。

こどもの親たちは、それぞれ木の箱を窓の外にだして、台所でつかうお野菜をうえておきました。そのほかにちよつとしたばら、をひと株うえておいたのが、みごとにそだつて、いきおいよくのびていました。ところで親たちのおもいつきで、その箱を、といをまたいで、横にならべておいたので、箱は窓と窓とのあいだで、むこうからこちらへと、つづいて、そっくり、生きのいい花のかべを、ふたつならべたように見えました。えんどう豆のつるは、箱から下のほうにたれさがり、ばらの木は、いきおいよく長い枝をのばして、それがまた、両方の窓にからみついて、おたがいにおじぎをしあっていました。まあ花と青葉でこしらえた、アーチのようなものでした。その箱は、高い所にありましたし、こどもたちは、その上にはいあがつてはいけ

ないのをしっていました。そこで、窓から屋根へ出て、ばらの花の下にある、ちいさなこしかけに、こしをかけるおゆるしをいただいで、そこでおもしろそうに、あそびました。

冬になると、そういうあそびもだめになりました。窓はどうかすると、まるつきりこおりついてしまいました。そんなとき、こどもたちは、だんろの上で銅貨どうかをあたたためて、こおった窓ガラスに、この銅貨をおしつけました。すると、そこにまるい、まんまるい、きれいなぞきあなができあがつて、このあなのむこうに、両方の窓からひとつずつ、それはそれはうれしそうな、やさしい目がぴかぴか光ります、それがあの男の子と、女の子でした。男の子はカイ、女の子はゲルダといいました。夏のあいだは、ただひとまたぎで、いつたりきたりしたものが、冬になると、ふたりのこどもは、いくつも、いくつも、はしごだん

を、おりたりあがつたりしななければ、なりませんでした。外そとには、雪がくるくる舞まつていました。

「あれはね、白いみつばちがあつまつて、とんでいるのだよ。」と、おばあさんがいいました。

「あのなかにも、女王ばちがいるの。」と、男の子はたずねました。この子は、ほんとうのみつばちに、そういうもののいることを、しっていたのです。

「ああ、いるともさ。」と、おばあさんはいいました。「その女王ばちは、いつもたくさんなかまのあつまつているところに、とんでいるのだよ。なかまのなかでも、いちばんからだが大きくて、けっして下にじつとしてはいない。すぐと黒い雲のなかへとんではいってしまふ。ま夜中に、いく晩も、いく晩も、女王は町の通から通へとびまわつて、窓のところをのぞくのさ。す

るとふしぎとそこでこおってしまつて、窓は花をふきつけたように、見えるのだよ。」

「ああ、それ、みたことがありますよ。」と、こどもたちは、口をそろえて叫さけびました。そして、すると、これはほんとうの話なのだ、とおもいました。

「雪の女王さまは、うちのなかへもはいつてこられるかしら。」と、女の子がたずねました。

「くるといいな。そうすれば、ぼく、それをあたたかいストーブの上ののせてやるよ。すると女王はとろけてしまふだろう。」と、男の子がいました。

でも、おばあさんは、男の子のかみの毛をなでながら、ほかのお話をしてくれました。

その夕方、カイはうちにおいて、着き物を半はん分ぶんぬぎかけながら、ふ

とおもいついて、窓のそばの、いすの上にあがつて、れいのち
いさなのぞきあなから、外をながめました。おもてには、ちら
ちら、こな雪が舞^まつていましたが、そのなかで大きなかたまり
がひとひら、植木箱のはしにおちました。するとみるみるそれ
は大きくなつて、とうとうそれが、まがいのない、わかい、ひ
とりの女の人のになりました。もう何百万という数の、星のよう
に光るこな雪で織^おつた、うすい白い紗^{しゃ}の着物^{きもの}を着ていました。
やさしい女の姿はしていましたが、氷のからだをしていました。
ぎらぎらひかる氷のからだをして、そのくせ生きているのです。
その目は、あかるい星をふたつならべたようでしたが、おちつ
きも休みもない目でした。女は、カイのいる窓のほうに、うな
ずきながら、手まねぎしました。カイはびつくりして、いすか
らとびおりてしまいました。すぐそのあとで、大きな鳥が、窓

の外をとんだような、けはいがしました。

そのあくる日は、からりとした、霜日しもびよりでした。——それからは、日にまし、雪どけのようきになつて、とうとう春が、やつてきました。お日さまはあたたかに、照てりかがやいて、緑みどりがもえだし、つばめは巢をつくりはじめました。あのむかいあわせの屋根うらべやの窓も、また、あけひろげられて、カイとゲルダとは、アパートのてっぺんの屋根上の雨あまどいの、ちいさな花ぞので、ことしもあそびました。

この夏は、じつにみごとに、ばらの花がさきました。女の子のゲルダは、ばらのことのうたわれている、さんび歌をしつていました。そして、ばらの花というと、ゲルダはすぐ、じぶんの花ぞののばらのことをかんがえました。ゲルダは、そのさんび歌を、カイにうたつてきかせますと、カイもいつしよにうた

いました。

「ばらの花はな さきてはちりぬ

おさなごエス やがてあおがん」

ふたりのこどもは、手をとりあつて、ばらの花にほおずりして、神さまの、みひかりのかがやく、お日さまをながめて、おさなごエスが、そこに、おいでになるかのように、うたいかけました。なんと、楽しい夏の日だったでしょう。いきいきと、いつまでもさくことをやめないようにみえる、ばらの花のにおいと、葉のみどりにつつまれた、この屋根の上は、なんていいところでしたらう。

カイとゲルダは、ならんで掛けて、けものや鳥のかいてある、

絵本をみていました。ちようどそのとき——お寺の、大きな塔とうの上で、とけいが、五つうちましましたが——カイは、ふと、

「あッ、なにかくりとむねにさきつたよ。それから、目にもなにかとびこんだようだ。」と、いいました。

あわてて、カイのくびを、ゲルダがかかえると、男の子は目をぱちぱちやりました。でも、目のなかにはなにもみえませんでした。

「じゃあ、とれてしまったのだろう。」と、カイはいいましたが、それは、とれたものではありませんでした。カイの目にはいったのは、れいの鏡から、とびちったかけらでした。そら、おぼえているでしょう。あのいやな、魔法まほうの鏡のかけらで、その鏡にうつすと、大きくていいものも、ちいさく、いやなものに、みえるかわり、いけないわるいものほど、いつそうきわだつてわ

るく見え、なんによらず、物事ものごとのあらが、すぐめだつて見えるのです。かわいそうに、カイは、しんぞうに、かけらがひとつはいつてしまいましたから、まもなく、それは氷のかたまりのように、なるでしょう。それなり、もういたみはしませんけれども、たしかに、しんぞうの中にのこりました。

「なんだつてべそをかくんだ。」と、カイはいいました。「そんなみつともない顔をして、ぼくは、もうどうもなつてやしないんだよ。」

「チエツ、なんだい。」こんなふうに、カイはふいに、いいだしました。「あのばらは虫がくつているよ。このばらも、ずいぶんへんてこなばらだ。みんなきたならしいばらだな。植わっている箱も箱なら、花も花だ。」

こういつて、カイは、足で植木の箱をけとばして、ばらの花

をひきちぎつてしまいました。

「カイちゃん、あんた、なにをするの。」と、ゲルダはさげびました。

カイは、ゲルダのおどろいた顔を見ると、またほかのばらの花を、もぎりだしました。それから、じぶんのうちの窓の中にとびこんで、やさしいゲルダとも、はなれてしまいました。

ゲルダがそのあとで、えほん絵本をもつてあそびにきたとき、カイは、そんなもの、かあさんにだっこされている、あかんぼのみるものだ、といいました。また、おばあさまがお話しても、カイはのべつに「だつて、だつて。」とばかりいつていました。それどころか、すきを見て、おばあさまのうしろにまわつて、目がねをかけて、おばあさまの口まねまで、してみせました。しかも、なかなかじょうずにやったので、みんなはおかしがつて

わらいました。まもなくカイは、町じゅうの人たちの、身ぶりや口まねでも、できるようになりました。なんでも、ひとくせかわったことや、みつともないことなら、カイはまねすることをおぼえました。

「あの子はきつと、いいあたまなのにちがいない。」と、みんないいましたが、それは、カイの目のなかにはいつた鏡のかけらや、しんぞうの奥ふかくさきつた、鏡のかけらのさせることでした。そんなわけで、カイはまごころをささげて、じぶんをしたらつてくれるゲルダまでも、いじめだしました。

カイのあそびも、すっかりかわって、ひどくこましやくれたものになりました。——ある冬の日、こな雪がさかんに舞いくるっているなかで、カイは大きな虫目がねをもつて、そとにでました。そして青いうわぎのすそをひろげて、そのうえにふつ

てくる雪をうけました。

「さあ、この目がねのところからのぞいてごらん、ゲルダちゃん。」と、カイはいいました。なるほど、雪のひとひらが、ずっと大きく見えて、みごとにひらいた花か、六角の星のようで、それはまったくうつくしいものでありました。

「ほら、ずいぶんたくみにできているだろう。ほんとうの花なんか見るよりも、ずっとおもしろいよ。かけたところなんか、ひとつだつてないものね。きちんと形をくずさずにいるのだよ。ただとけさえしなければね。」と、カイはいいました。

そののちまもなく、カイはあつい手ぶくろをはめて、そり、をかついで、やってきました。そしてゲルダにむかつて、

「ぼく、ほかのこともたちのあそんでいる、ひろばのほうへいっていいと、いわれたのだよ。」と、ささやくと、そのままいつ

てしまいました。

その大きなひろばでは、こどもたちのなかでも、あつかましいのが、そりを、おひやくしようたちの馬車の、うしろにいわざわざつけて、じょうずに馬車といっしょにすべっていました。これは、なかなかおもしろいことでした。こんなことで、こどもたちたれも、むちゆうになつてあそんでいると、そこへ、いちだい、大きなそりがやってきました。それは、まっ白にぬつてあつて、なかにたれだか、そまつな白い毛皮けがわにくるまつて、白いそまつなぼうしをかぶつた人がのっていました。そのそりは二回ばかり、ひろばをぐるぐるまわりました。そこでカイは、きつそくそれに、じぶんのちいさなそりを、しばらくつけて、いっしょにすべっていました。その大そりは、だんだんはやくすべつて、やがて、つぎの大通を、まっすぐに、はしつていきました。そ

りをはしらせていた人は、くるりとふりかえつて、まるでよくカイをしつてゐるように、なれなれしいようすで、うなずきましたので、カイはついそりをとくのをやめてしまいました。こんなぐあいにして、とうとうそりは町の門のそとに、でてしまいました。そのとき、雪が、ひどくふつてきたので、カイはじぶんの手のさきもみることができませんでした。それでもかまわず、そりははしつていきました。カイはあせつて、しきりとつなをうごかして、その大そりからはなれようとしましたが、小そりはしつかりと大そりにしぼりつけられていて、どうにもなりませんでした。ただもう、大そりにひっぱられて、風のようにとんでいきました。カイは大声をあげて、すくいをもとめました。たれの耳にも、きこえません。雪はぶつつけるようにふりしきりました。そりは前へ前へと、とんでいきま

した。ときどき、そりがとびあがるのは、生いけがきや、おほりの上を、とびこすのでしょうか、カイはまったくふるえあがってしまいました。主のおいのりをしようと思つても、あたまにかんでくるのは、かけぎんの九九ばかりでした。

こな雪のかたまりは、だんだん大きくなつて、しまいには、大きな白いにわとりのようになりました。ふとその雪のにわとりが、両がわにとびたちました。とたんに、大そりはとまりました。そりをはしらせていた人が、たちあがったのを見ると、毛皮のがいとうもぼうしも、すっかり雪でできていました。それはすらりと、背の高い、目のくらむようにまっ白な女の人でした。それが雪の女王だったのです。

「ずいぶんよくはしつたわね。」と、雪の女王はいいました。「あら、あんた、ふるえているのね。わたしのくまの毛皮におは

り。」

こういいながら女王は、カイをじぶんのそりにいれて、かたわらにすわらせ、カイのからだに、その毛皮をかけてやりました。するとカイは、まるで雪のふきつもったなかに、うずめられたように感じました。

「まださむいの。」と、女王はたずねました。それからカイのひたいに、ほおをつけました。まあ、それは、氷よりもつとつめたい感じでした。そして、もう半分氷のかたまりになりかけていた、カイのしんぞうに、じいんとしみわたりました。カイはこのまま死んでしまうのではないかと、おもいました。——けれど、それもほんのわずかのあいだで、やがてカイは、すつかり、きもちがよくなつて、もう身のまわりのさむさなど、いっそう気にならなくなりました。

「ぼくのそりは——ぼくのそりを、わすれちゃいけない。」

カイがまず第一におもいだしたのは、じぶんのそりのことではありません。そのそりは、白いにわとりのうちのいわに、しっかりとむすびつけられました。このにわとりは、そりをせなかにのせて、カイのうしろでとんでいました。雪の女王は、またもういちど、カイにほおずりました。それで、カイは、もう、かわいらしいゲルダのことも、おばあさまのことも、うちのことも、なにもかも、すっかりわすれてしまいました。

「さあ、もうほおずりはやめましょうね。」と、雪の女王はいいました。「このうえすると、お前を死なせてしまうかもしれないからね。」

カイは女王をみあげました。まあそのうつくしいことといつたら。カイは、これだけかしこそうなりっぱな顔がほかにあろ

うとは、どうしたつておもえませんでした。いつか窓のところ
にきて、手まねきしてみせたときとちがつて、もうこの女王が、
氷でできているとは、おもえなくなりました。カイの目には、
女王は、申しぶんなくかんぜんで、おそろしいなどとは、感じな
くなりました。それでうちとけて、じぶんは分数ぶんすうまでも、あん
ざんで、できることや、じぶんの国が、いく平方マイルあつて、
どのくらい的人口があるか、しつていふことまで、話しました。
女王は、しじゅう、にこにこして、それをきいていました。そ
れが、なんだ、しつていふことは、それっぱかしかと、いわれ
たようにおもつて、あらためて、ひろいひろい大空をあおぎま
した。すると、女王はカイをつれて、たかくとびました。高い
黒雲の上までも、とんで行きました。あらしはぎあざあ、ひゅ
うひゅう、ふきすすきんで、昔の歌でもうたつていふようでした。

女王とカイは、森や、湖や、海や、陸の上を、とんで行きました。下のほうでは、つめたい風がごうごううなつて、おおかみのむれがほえたり、雪がしやつしやつときしつたりして、その上に、まつくろなからすがカアカアないてとんでいました。しかし、はるか上のほうには、お月さまが、大きくこうこうと、照っていました。このお月さまを、ながいながい冬の夜じゅう、カイはながめてあかしました。ひるになると、カイは女王の足もとでねむりました。

第三のお話

魔法の使える女の花ぞの

雪の女王 SNEDRONNINGEN



ところで、カイが、あれなりかえつてこなかったとき、あの女の子のゲルダは、どうしたでしょう。カイはまあどうしたのか、たれもしりませんでした。なんの手がかりもえられませんでした。こどもたちの話でわかったのは、カイがよその大きなそりに、じぶんのそりをむすびつけて、町をはしりまわって、町の門からそとへでていったということだけでした。さて、それからカイがどんなことになってしまったか、たれも知っているものはありませんでした。いくにんもの人のなみだが、この子のために、そそがれました。そして、あのゲルダは、そのうちでも、ひとり、もうながいあいだ、むねのやぶれるほどになきました。——みんなのうわさでは、カイは町のすぐそばを流れている川におちて、おぼれてしまったのだらうということでした。ああ、まったくながいながい、いんきな冬でした。

いま、春はまた、あたたかいお日さまの光とつれだつてやつてきました。

「カイちゃんは死んでしまったのよ。」と、ゲルダはいいました。

「わたしはそうおもわないね。」と、お日さまがいました。

「カイちゃんは死んでしまったのよ。」と、ゲルダはつばめにいいました。

「わたしはそうおもいません。」と、つばめたちはこたえました。そこで、おしまいには、ゲルダは、じぶんでも、カイは死んだのではないと、おもうようになりました。

「あたし、あたらしい赤いくつをおろすわ。あれはカイちゃんのみまだみなかつたくつよ。あれをはいて川へおりていつて、カイちゃんのことをきいてみましょう。」と、ゲルダは、ある朝にいました。で、朝はやかったので、ゲルダはまだねむっていた

おばあさまに、せつぷんして、赤いくつをはき、たつたひとりぼっちで、町の門を出て、川のほうへあるいていきました。

「川さん、あなたが、わたしのすきなおともだちを、とつていつてしまったというのは、ほんとうなの。この赤いくつをあげるわ。そのかわり、カイちゃんをかえしてね。」

すると川の水が、よしよしというように、みように波だつてみえたので、ゲルダはじぶんのもっているものなかでいちばんすきだった、赤いくつをぬいで、ふたつとも、川の中になげこみました。ところが、くつは岸の近くにおちたので、さざ波がすぐ、ゲルダの立っているところへ、くつをはこんできてしまいました。まるで川は、ゲルダから、いちばんだいじなものをもろうことをのぞんでいないように見えました。なぜなら、川はカイをかくしてはいなかったからです。けれど、ゲルダは、

くつをもつととおくのほうへなげないからいけなかつたのだとおもいました。そこで、あしのしげみにうかんでいた小舟にのりました。そして舟のいちばんはしへいつて、そこからくつをなげこみました。でも、小舟はしつかりと岸にもやってなかつたので、くつをなげるので動かしたひょうしに、岸からすべり出してしまいました。それに気がついて、ゲルダは、いそいでひっかえそうとしましたが、小舟のこちらのはしまでこないうちに、舟は二三尺も岸からはなれて、そのまま、どんどんはやく流れていきました。

そこで、ゲルダは、たいそうびつくりして、なきだしました。が、すずめのほかは、たれもその声をきくものはありませんでした。すずめには、ゲルダをつれかえる力はありませんでした。でも、すずめたちは、岸にそつてとびながら、ゲルダをなぐさ

めるように、

「だいじょうぶ、ぼくたちがいます。」と、なきました。

小舟は、ずんずん流れにはこぼれていきました。ゲルダは、足にくつしたをはいただけで、じつと舟のなかにすわったままでいました。ちいさな赤いくつは、うしろのほうで、ふわふわういていましたが、小舟においつくことはできませんでした。小舟のほうが、くつよりも、もつとはやくながれていったからです。

岸は、うつくしいけしきでした。きれいな花がさいていたり、古い木が立っていたり、ところどころ、なだらかな土手どてには、ひつじやめうしが、あそんでいました。でも、にんげんの姿は見えませんでした。

「ことによると、この川は、わたしを、カイちゃんのところへ、

つれていつてくれるのかもしれないわ。」と、ゲルダはかんがえました。

それで、だんだんげんきがでてきたので、立ちあがって、ながいあいだ、両方の青あおとうつくしい岸をながめていました。それからゲルダは、大きなさくらんぼばたけのところに来ました。そのはたけの中には、ふうがわりな、青や赤の窓のついた、一けんいけんのちいさな家がたっていました。その家はかやぶきで、おもてには、舟で通りすぎる人たちのほうにむいて、木製もくせいのふたりのへいたいが、銃剣じゅうけん肩かたに立っていました。

ゲルダは、それをほんとうのへいたいかとおもって、こえをかけました。しかし、いうまでもなくそのへいたいは、なんのこたえもしませんでした。ゲルダはすぐそのそばまできました。波が小舟を岸のほうにはこんだからです。

ゲルダはもつと大きなこえで、よびかけてみました。すると、その家のなかから、しゅもくづえ撞木杖にすがつた、たいそう年とつたおばあさんが出てきました。おばあさんは、目のさめるようにきれいな花をかいだ、大きな夏ぼうしをかぶっていました。

「やれやれ、かわいそうに。どうしておまえさんは、そんなに大きな波のたつ上を、こんなとおいところまで流れてきたのだね。」と、おばあさんはいいました。

それからおばあさんは、ざぶりざぶり水の中にはいつて、撞木杖で小舟をおさえて、それを陸おかのほうへひっぱつてきて、ゲルダをだきおろしました。ゲルダはまた陸にあがることのできたのをうれしいとおもいました。でも、このみなれないおばあさんは、すこし、こわいようでした。

「さあ、おまえさん、名まえをなんというのだから、またどうし

て、ここへやってきたのだから、話してごらん。」と、おばあさんはいいました。そこでゲルダは、なにもかも、おばあさんに話しました。おばあさんはうなずきながら、「ふん、ふん。」と、いいました。ゲルダは、すっかり話してしまつてから、おばあさんがカイをみかけなかつたかどうか、たずねますと、おばあさんは、カイはまだここを通らないが、いずれそのうち、ここを通るかもしれない。まあ、そう、くよくよおもわないで、花をながめたり、さくらんぼをたべたりしておいで。花はどんな絵本のよりも、ずっときれいだし、その花びらの一まい、一まいが、ながいお話をしてくれるだろうからといました。それからおばあさんは、ゲルダの手をとつて、じぶんのちいさな家へつれていって、中から戸にかぎをかけました。

その家の窓は、たいそう高くて、赤いのや、青いのや、黄いろ

の窓ガラスだったので、お日さまの光はおもしろい色にかわつて、きれいに、へやのなかにさしこみました。つくえの上には、とてもおいしいきくらんぼがおいてありました。そしてゲルダは、いくらたべてもいいという、おゆるしがたものですから、おもうぞんぶんそれをたべました。ゲルダがきくらんぼをたべているあいだに、おばあさんが、金のくしで、ゲルダのかみの毛をすきました。そこで、ゲルダのかみの毛は、ばらの花のような、まるっこくて、かわいらしい顔のまわりで、金色にちりちりまいて、光っていました。

「わたしは長いあいだ、おまえのような、かわいらしい女の子がほしいとおもっていたのだよ。さあこれから、わたしたちといっしょに、なかよくくらそうね。」と、おばあさんはいいました。そしておばあさんが、ゲルダのかみの毛にくしをいれてやつて

いるうちに、ゲルダはだんだん、なかよしのカイのことなどは
わすれてしまいました。というのは、このおばあさんは魔法が
使えるからでした。けれども、おばあさんは、わるい魔女では
ありませんでした。おばあさんはじぶんのたのしみに、ほんの
すこし魔法を使うだけで、こんども、それをつかったのは、ゲ
ルダをじぶんの手もとにおきたいためでした。そこで、おばあ
さんは、庭へ出て、そのぼらの木にむかって、かたっぱしか
ら撞木杖をあてました。すると、いままでうつくしく、さきほ
こつていたぼらの木も、みんな、黒い土の中にしずんでしまっ
たので、もうたれの目にも、どこにいままでぼらの木があつた
か、わからなくなりました。おばあさんは、ゲルダがぼらを見
て、自分の家のぼらのことをかながえ、カイのことをおもいだ
して、ここからにげていってしまふといけなとおもつたので

す。

さて、ゲルダは花ぞのにあんないされました。——そこは、まあなんといい、いい香りがあふれていて、目のさめるように、きれいなところでしたろう。花という花は、こぼれるようにさいていました。そこでは、一ねんじゅう花がさいていました。どんな絵本の花だって、これよりうつくしく、これよりにぎやかな色にさいてはいませんでした。ゲルダはおどりあがつてよろこびました。そして夕日が、高いさくらの木のむこうにはいつてしまうまで、あそびました。それからゲルダは、青いすみれの花がいつぱいつまった、赤い絹のクシヨンのある、きれいなベッドの上で、結婚式の日の女王さまのような、すばらしい夢をむすびました。

そのあくる日、ゲルダは、また、あたたかいお日さまのひかり

をあびて、花たちとあそびました。こんなふうにして、いく日もいく日もたちました。ゲルダは花ぞいの花をのこらずしりました。そのくせ、花ぞいの花は、かずこそずいぶんたくさんありましたけれど、ゲルダにとつては、どうもまだなにか、ひとりろたりないようにおもわれました。でも、それがなんの花であるか、わかりませんでした。するうちある日、ゲルダはなにげなくすわって、花をかいたおばあさんの夏ぼうしを、ながめていましたが、その花のうちで、いちばんうつくしいのは、ばらの花でした。おばあさんは、ほかのばらの花をみんな見えなように、かくしたくせに、じぶんのぼうしにかいたばらの花を、けすことを、ついわすれていたのです。まあ手ぬかりと
いうことは、たれにでもあるものです。

「あら、ここのお庭には、ばらがないわ。」と、ゲルダはさげび

ました。

それから、ゲルダは、花ぞのを、いくどもいくども、さがしまわりましたけれども、ばらの花は、ひとつもみつかりませんでした。そこで、ゲルダは、花ぞのにすわつてなきました。ところが、なみだが、ちようどばらがうずめられた場所の上におちました。あたたかいなみだが、しつとりと土をしめらすと、ばらの木は、みるみるしずまない前とおなじように、花をいつぱいつけて、地の上にあらわれてきました。ゲルダはそれをだいて、せつぷんしました。そして、じぶんのうちのばらをおもいだし、それといっしょに、カイのこともおもいだしました。

「まあ、あたし、どうして、こんなところにひきとめられていたのかしら。」と、ゲルダはいいました。「あたし、カイちゃんをさがさなくてはならなかったのだわ——カイちゃん、どこにい

るか、しらなくつて。あなたは、カイちゃんが死んだとおもつて。」と、ゲルダは、ばらにききました。

「カイちゃんは死にはしませんよ。わたしどもは、いままで地のなかにいました。そこには死んだ人はみないましたが、でも、カイちゃんはみえませんでしたよ。」と、ばらの花がこたえました。

「ありがとう。」と、ゲルダはいつて、ほかの花のところへいつて、ひとつひとつ、うてなのなかをのぞきながらたずねました。「カイちゃんはどこにいるか、しらなくつて。」

でも、どの花も、日なたぼっこしながら、じぶんたちのつくつたお話や、おとぎばなしのことばかりかんがえていました。ゲルダはいろいろと花にきいてみましたが、どの花もカイのことについては、いっこうにしりませんでした。

ところで、おにゆりは、なんといつたでしょう。

「あなたには、たいこの音が、ドンドンというのがきこえますか。あれには、ふたつの音しかないのです。だからドンドンといつでもやっているのです。女たちがうたう、とむらいのうたをおききなさい。また、坊さんぼふのあげる、おいのりをおききなさい。——インド人じんのやもめは、火葬かそうのたきぎのつまれた上に、ながい赤いマントをまとして立っています。焰ほのおがその女と、死んだ夫おつとのしかばねのまわりにたちのぼります。でもインドの女は、ぐるりにあつまつた人たちのなかの、生きているひとりの男のことをかんがえているのです。その男の目は焰よりもあつくもえ、その男のやくような目つきは、やがて、女からだをやきつくして灰にする焰などよりも、もつとはげしく、女の心の中で、もえていたのです。心の焰は、火あぶりのたきぎのな

かで、もえつきるものでしょうか。」

「なんのことだか、まるでわからないわ。」と、ゲルダがこたえ
ました。

「わたしの話はそれだけさ。」と、おにゆりはいいました。

ひるがおは、どんなお話をしたでしょう。

「せまい山道のむこうに、昔のさむらいのお城がぼんやりみえ
ます。くずれかかった、赤い石がきのうえには、つたがふかく
おいしげって、ろだいのほうへ、ひと葉ひと葉、はいあがつて
います。ろだいの上には、うつくしいおとめが、らんかんによ
りかかって、おうらいをみおろしています。どんなばらの花で
も、そのおとめほど、みずみずとは枝にさきだしません。どん
なりんごの花でも、こんなにかるがるとしたふうに、木から風
がはこんでくることはありません。まあ、おとめのうつくしい

絹の着物のさらさらなること。

あの人はまだこないのかしら。」

「あの人というのは、カイちゃんのことなの。」と、ゲルダがたずねました。

「わたしは、ただ、わたしのお話をしただけ。わたしの夢をね。」と、ひるがおはこたえました。

かわいい、まつゆきそうは、どんなお話をしたでしょう。

「木と木のあいだに、つなでつるした長い板がさがっています。ぶらんこなの。雪のように白い着物を着て、ぼうしには、ながい、緑色の絹のリボンをまいた、ふたりのかわいらしい女の子が、それにのってゆられています。この女の子たちよりも、大きい男きょうだいも、そのぶらんこに立ってのっています。男の子は、かた手にちいさなお皿をもってるし、かた手には土製

のパイプをにぎっているのです、からだをささえるために、つな
にうでをまきつけています。男の子はシャボンだまをふいてい
るのです。ぶらんこがゆれて、シャボンだまは、いろんなうつ
くしい色にかわりながらとんで行きます。いちばんおしまい
のシャボンだまは、風にゆられながら、まだパイプのところにつ
いています。ぶらんこはとぶようにゆれています。あら、シャボ
ンだまのように身のかるい黒犬があと足で立つて、のせてもら
おうとしています。ぶらんこはゆれる、黒犬はひつくりかえつ
て、ほえているわ。からかわれて、おこっているのね。シャボン
だまははじけます。——ゆれるぶらんこ。われてこわれるシャ
ボンだま。——これがわたしの歌なんです。」

「あなたのお話は、とてもおもしろそうね。けれどあなたは、か
なしそうに話しているのね。それからあなたは、カイちゃんの

ことは、なんにも話してくれないのね。」

ヒヤシンスの花は、どんなお話をしたでしょう。

「あるところに、三人の、すきとおるようにうつくしい、きれいな姉いもうとがおりました。なかでいちばん上のむすめの着物は赤く、二ばん目のは水色で、三ばん目のはまっ白でした。きようだいたちは、手をとりあつて、さえた月の光の中で、静かな湖みづうみのふちにでて、おどりをおどります。三人とも妖女ようじよではなくて、にんげんでした。そのあたりには、なんとなくあまい、いいにおいがしていました。むすめたちは森のなかにきえました。あまい、いいにおいが、いつそうつよくなりました。すると、その三人のうつくしいむすめをいれた三つのひつぎが、森のしげみから、すうつとあらわれてきて、湖のむこうへわたつていきました。つちぼたるが、そのぐるりを、空に舞まっているち

いさなともしびのように、ぴかりぴかりしていました。おどりくるつていた三人のむすめたちは、ねむつたのでしょうか。死んだのでしょうか。——花のにおいはいいました。あれはなきがらです。ゆうべの鐘かねがなくなつたひとたちをとむらいます。」

「ずいぶんかなしいお話ね。あなたの、そのつよいにおいをおくと、あたし死んだそのむすめさんたちのことを、おもいださずにはいられませんわ。ああ、カイちゃんは、ほんとうに死んでしまったのかしら。地のなかにはいつていたばらの花は、カイちゃんは死んではいないといつてるけれど。」

「チリン、カラン。」と、ヒヤシンスのすずがなりました。「わたしはカイちゃんのために、なつているではありません。カイちゃんなんて人は、わたしたち、すこしもしりませんもの。わたしたちは、ただ自分のしつているたつたひとつの歌を、う

たつているだけです。」

それから、ゲルダは、緑の葉のあいだから、あかるくさいている、たんぽぽのところへいきました。

「あなたはまるで、ちいさな、あかるいお日さまね。どこにわたしのおともだちがいるか、しつていたらおしえてくださいな。」と、ゲルダはいいました。

そこで、たんぽぽは、よけいあかるくひかりながら、ゲルダのほうへむきました。どんな歌を、その花がうたつたでしょう。その歌も、カイのことではありませんでした。

「ちいさな、なか庭には、春のいちばんはじめの日、うららかなお日さまが、あたたかに照っていました。お日さまの光は、おとなりの家の、まっ白なかべの上から下へ、すべりおちていました。そのそばに、春いちばんはじめにさく、黄色い花が、か

がやく光の中に、金のようにさいっていました。おばあさんは、いすをそとにだして、こしをかけていました。おばあさんの孫の、かわいそうな女中ぼうこうをしているうつくしい女の子が、おばあさんにあうために、わずかなおひまをもらって、うちへかえつてきました。女の子はおばあさんにせつぶんしました。このめぐみおおいせつぶんには金きんが、こころの金きんがありました。その口にも金、そのふむ土にも金、そのあさのひとときにも金がありました。これがわたしのつまらないお話です。」と、たんぽぽがいいました。

「まあ、わたしのおばあさまは、どうしていらつしやるかしら。」と、ゲルダはためいきをつきました。「そうよ。きつとおばあさまは、わたしにあいたがつて、かなしがつていらつしやるわ。カイちゃんのいなくなつたとおなじように、しんぱいしていらつ

しやるわ。けれど、わたし、じきにカイちゃんをつれて、うちにかえられるでしょう。——もう花たちにいくらたずねてみたつてしかたがない。花たち、ただ、自分の歌をうたうだけで、なんにもこたえてくれないのだから。」

そこでゲルダは、はやくかけられるように、着物をきりりとたくしあげました。けれど、黄^きずいせんを、ゲルダがとびこえようとしたとき、それに足がひっかかりました。そこでゲルダはたちどまつて、その黄色い、背の高い花にむかつてたずねました。

「あんた、カイちゃんのこと、なんか知っているの。」

そしてゲルダは、ここんで、その花の話すことをききました。その花はなんといったでしょう。

「わたし、じぶんがみられるのよ。じぶんがわかるのよ。」と、

黄ずいせんはいいました。「ああ、ああ、なんてわたしはいいに
おいがするんだらう。屋根うらのちいさなへやに、半はだかの、
ちいさなおどりこが立っています。おどりこはかた足で立った
り、両足で立ったりして、まるで世界中をふみつけるように見
えます。でも、これはほんの目のまよいです。おどりこは、ち
いさな布ぬのに、湯わかしから湯をそそぎます。これはコルセット
です。——そうです。そうです、せいけつがなによりです。白
い上着うわぎも、くぎにかけてあります。それもまた、湯わかしの湯
であらって、屋根でかわかしたもののなのです。おどりこは、そ
の上着をつけて、サフラン色のハンケチをくびにまきました。
ですから、上着はよけい白くみえました。ほら、足をあげた。
どう、まるでじくの上に立って、うんとふんばった姿は。わた
し、じぶんが見えるの。じぶんがわかるの。」

「なにもそんな話、わたしにしなくてもいいじゃないの。そんなこと、どうだつて、かまわないわ。」と、ゲルダはいいました。それでゲルダは、庭のむこうのはしまでかけて行きました。その戸はしまつていましたが、ゲルダがそのさびついたつてを、どんとおしたので、はずれて戸はぱんとひらきました。ゲルダはひろい世界に、はだしのままでとびだしました。ゲルダは、三度^どもあとをふりかえつてみましたが、たれもおつかけてくるものはありませんでした。とうとうゲルダは、もうとてもはしることができなくなつたので、大きな石の上にこしをおろしました。そこらを見まわしますと、夏はすぎて、秋がふかくなつていました。お日さまが年中かがやいて、四季^{しき}の花がたえずさいていた、あのうつくしい花ぞのでは、そんなことはわかりませんでした。

「ああ、どうしましょう。あたし、こんなにおくれてしまつて。」と、ゲルダはいいました。「もうとうに秋になつてきているのね。さあ、ゆつくりしてはいられないわ。」

そしてゲルダは立ちあがつて、ずんずんあるきだしました。まあ、ゲルダのかよわい足は、どんなにいたむし、そして、つかれていったことでしょう。どこも冬がれて、わびしいけしきでした。ながいやなぎの葉は、すっかり黄ばんで、きりが雨しずくのように枝からたれていました。ただ、とげのある、こけも、もだけは、まだ実をむすんでいました。こけもはすつぱくて、くちがまがるようでした。ああ、なんてこのひろびろした世界は灰色で、うすぐらくみえたことでしょう。

第四のお話

王子と王女

雪の女王 SNEDRONNINGEN



ゲルダは、またも、やすまなければなりませんでした。ゲルダがやすんでいた場所の、ちょうどむこうの雪の上で、一わの大きなからすが、ぴよんぴよんやっています。このからすは、しばらくじつとしたなりゲルダをみつめて、あたまをふっていました。が、やがてこういいました。

「カア、カア、こんちは。こんちは。」

からすは、これよりよくは、なにもいうことができませんでしたが、でも、ゲルダをなつかしくおもっていて、このひろい世界で、たったひとりぼっち、どこへいくのだといって、たずねました。この「ひとりぼっち。」ということばを、ゲルダはよくあじわって、しみじみそのことばに、ふかいおみのこもっていることをおもいました。ゲルダはそこでからすに、じぶんの身の上のことをすつかり話してきかせた上、どうかしてカイを

みなかったか、たずねました。

するとからすは、ひどくまじめにかんがえこんで、こういいました。

「あれかもしれない。あれかもしれない。」

「え、しつてて。」と、ゲルダは大きなこえでいって、からすをらんぼうに、それこそいきのとまるほどせつぷんしました。

「おてやわらかに、おてやわらかに。」と、からすはいいました。「どうも、カイちゃんをしつているような気がします。たぶん、あれがカイちゃんだろうとおもいますよ。けれど、カイちゃん、は、王女さまのところにおいて、あなたのことなどは、きつとわすれていますよ。」

「カイちゃんは、王女さまのところにいるんですって。」と、ゲルダはききました。

「そうです。まあ、おききなさい。」と、からすはいいました。「どうも、わたしにすると、にんげんのことばで話すのは、たいていそうなるほねおりです。あなたにからすのことばがわかると、ずっとうまく話せるのだからなあ。」

「まあ、あたし、ならつたことがなかつたわ。」と、ゲルダはいいました。「でも、うちのおばあさまは、おできになるのよ。あたし、ならつておけばよかった。」

「かまいませんよ。」と、からすはいいました。「まあ、できるだけしてみますから。うまくいけばいいが。」

それからからすは、しつていることを、話しました。

「わたしたちがいまいる国には、たいそうかしこい王女さまがおいでなるのです。なにしろ世界中のしんぶんをのこらず読んで、のこらずまたわすれてしまいません。まあそんなわけで、た

いそうりこうなかなたなのです。さて、このあいだ、王女さまは玉座ぎよくざにおすわりになりました。玉座というものは、せけんていうほどたのしいものではありません。そこで王女さまは、くちずさみに歌をうたいだしました。その歌は『なぜに、わたしは、むことらぬ』といった歌でした。そこで、『なるほど、それをもつともだわ。』と、いうわけで、王女さまはけっこんしようとおもいました。でも夫おつとにするなら、ものをたずねても、すぐとこたえるようなのがほしいとおもいました。だって、ただそこにつつ立つて、ようすぶつているだけでは、じきにたいくつしてしまいますからね。そこで、王女さまは、女官じよかんたち、のこらずおめしになって、このもくろみをお話になりました。

女官たちは、たいそうおもしろくおもいました、『それはよいおもいつきでございます。わたくしどもも、つい

さきごろ、それとおなじことをかんがえついたので。』な
どと申しました。

「わたしのいつていることは、ごく、ほんとうのことなのです
よ。」と、からすはいつて、「わたしには、やさしい、いな、ずけが
あつて、その王女さまのお城に、自由にとんでいける、それが
わたしにすつかり話してくれたのです。」と、いいそえました。
いうまでもなく、その、いな、ずけというのはからすでした。
というのは、にたものどうしで、からすはやはり、からすなか
まであつまります。

ハートと、王女さまのかしらもじでふちどつたしんぶんが、
さつそく、はつこうされました。それには、ようすのりつぱな、
わかい男は、たれでもお城にきて、王女さまと話すことができ
る。そしてお城へきても、じぶんのうちにいるように、気やす

く、じょうずに話した人を、王女は夫としてえらぶであろうと
いうことがかいてありました。

「そうです。そうです。あなたはわたしをだいじょうぶ信じて
ください。この話は、わたしがここにこうしてすわっているの
とどうよう、ほんとうの話なのですから。」と、からすはいいま
した。

「わかい男の人たちは、むれをつくつて、やってきました。そし
てたいそう町はこんぎつして、たくさんの人が、あつちへいつた
り、こつちへきたり、いそがしそうにかけずりまわっていました
た。でもはじめの日も、つぎの日も、ひとりだつてうまくやつた
ものはありません。みんなは、お城のそとでこそ、よくしゃべ
りました。いちどお城の門をはいつて、銀ずくめのへいたい
をみたり、かいだんをのぼつて、金ぴかのせいふくをつけたお

役人に出あつて、あかるい大広間にはいると、とたんにはうつとなつてしまいました。そして、いよいよ王女さまのおいでになる玉座の前に出たときには、たれも王女さまにいわれたことばのしりを、おうむがえしにくりかえすほかありませんでした。王女さまとすれば、なにもじぶんのいったことばを、もういちどいつてもらつてもしかたがないでしょう。ところが、だれも、ごてんのなかにはいると、かぎたばこでものまされたように、ふらふらで、おうらいへでてきて、やっとわれにかえつて、くちがきけるようになる。なにしろ町の門から、お城の門まで、わかいひとたちが、れつをつくつてならんでいました。わたしはそれをじぶんで見てきましたよ。」と、からすが、ねんをおしていいました。

「みんなは自分のばんが、なかなかまわつてこないの、おな

かがすいたり、のどがかわいたりしましたが、ごてんの中では、なまぬるい水いっぱいくれませんでした。なかで気のきいたせんせいたちが、バタパンご持参で、やってきていましたが、それをそばの人にわけようとはしませんでした。このれんじゅうの気では——こいつら、たんとひもじそうな顔をしているがい。おかげで王女さまも、ごさいようになるまいから——というのでしよう。」

「でも、カイちゃんはどうしたのです。いつカイちゃんはやってきたのです。」と、ゲルダはたずねました。「カイちゃんは、その人たちのなかまにいたのですか。」

「まあまあ、おまちなさい。これから、そろそろ、カイちゃんのことになるのです。ところで、その三日目に、馬にも、馬車にもものらないちいさな男の子が、たのしそうにお城のほうへ、あ

るいていきました。その人の目は、あなたの目のようにかがやいて、りっぱな、長いかみの毛をもっていました。着物はぼろぼろにきれていました。」

「それがカイちゃんなのね。ああ、それでは、とうとう、あたし、カイちゃんをみつけたわ。」と、ゲルダはうれしそうにさけんで、手をたたきました。

「その子は、せなかに、ちいさなはいのうをしょっていました。」と、からすがいいました。

「いいえ、きつと、それは、そりよ。」と、ゲルダはいいました。「カイちゃんは、そりといっしょに見えなくなってしまったのですもの。」

「なるほど、そうかもしれないですね。」と、からすはいいました。「なにしろ、ちよつと見ただけですから。しかし、それは、みんな

なわたしのやさしいいいなずけからきいたのです。それから、その子はお城の門をはいって、銀の軍服ぐんぷくのへいたいをみながら、だんをのぼって、金ぴかのせいふくのお役人の前にでましたが、すこしもまごつきませんでした。それどころか、へいきでえしゃくして、

『かいだんの上に立っているのは、さぞたいくつでしょうね。ではごめんこうむって、わたしは広間にはいらせてもらいましよう。』と、いいました。広間にはあかりがいつぱいについて、枢密顧問官すうみつこもんかんや、身分の高い人たちが、はだしで金の器うつわをはこんであるいていました。そんな中で、たれだつて、いやでもおごそかなきもちになるでしょう。ところへ、その子のながぐつは、やけにやかましくギユウ、ギユウなるのですが、いつこうにへいきでした。」

「きつとカイちゃんよ。」と、ゲルダがさげびました。

「だって、あたらしい長ぐつをはいていましたもの。わたし、そのくつがギユウ、ギユウいうのを、おばあさまのへやでできたわ。」

「そう、ほんとうにギユウ、ギユウつてなりましたよ。」と、からすはまた話しはじめました。

「さて、その子は、つかつかと、糸車ほどの大きなしんじゅに、こしをかけている、王女さまのご前ぜんに進みました。王女さまのぐるりをとりまいて、女官たちがおつきを、そのおつきがまたおつきを、したがえ、侍従じじゆうがけらいの、またそのけらいをしたがえ、それがまた、めいめい小姓こしやうをひきつれて立っていました。しかも、とびらの近くに立っているものほど、いばっているように見えました。しじゅう、うわぐつであるきまわっていた、

けらしいのけらしいの小姓なんか、とてもあおむいて顔が見られないくらいでした。とにかく、戸ぐちのところではいばりかえっているふうは、ちよつと見ものでした。」

「まあ、ずいぶんこわいこと。それでもカイちゃんは、王女さまとけつこんしたのですか。」と、ゲルダはいいました。

「もし、わたしがからすでなかつたなら、いまのいいなずけをすてても、王女さまとけつこんしたかもしれない。人のうわさによりますと、その人は、わたしがからすのことばを話すと、きとどうよう、じょうずに話したということでした。わたしは、そのことを、わたしのいいなずけからきいたのです。どうして、なかなかようすのいい、げんきな子でした。それも王女さまとけつこんするためにはなくて、ただ、王女さまがどのくらいかしこいか知ろうとおもってやってきたのですが、それ

で王女さまがすきになり、王女さまもまたその子がすきになつたというわけです。」

「そう、いよいよ、そのひと、カイちゃんにちがいないわ。カイちゃんは、そりやりこうで、分数まであんざんでやれますもの——ああ、わたしを、そのお城へつれていってくださらないこと。」と、ゲルダはいいました。

「さあ、くちでいうのはたやすいが、どうしたら、それができるか、むずかしいですよ。」と、からすはいいました。「ところで、まあ、それをどうするか、まあ、わたしのいいなずけにそうだんしてみましよう。きつと、いいちえをかしてくるかもしれない。なにしろ、あなたのような、ちいさな娘さんが、お城の中にはいることは、ゆるされていらないのですからね。」

「いいえ、そのおゆるしならもらえてよ。」と、ゲルダがこたえ

ました。「カイちゃんは、わたしがきたときけば、すぐに出てきて、わたしをいれてくれるでしょう。」

「むこうのかきねのところまで、まっついていらつしやい。」と、からすはいって、あたまをふりふりとんでいってしまいました。

そのからすがかえつてきたときには、晩もだいぶくらくなくなっていました。

「すてき、すてき。」と、からすはいいました。「いいなずけが、あなたによろしくとのことでしたよ。さあ、ここに、すこしばかりパンをもつてきてあげました。さぞ、おなががすいたでしょう。いいなずけが、だいどころからもつてきたのです。そこにはたくさんまだあるのです。——どうも、お城へはいることは、できそうもありませんよ。なぜとって、あなたはくつをはいていませんから、銀の軍服のへいたいや、金ぴかのせいふくの

お役人たちが、ゆるしてくれないでしょうからね、だがそれで泣いてはいけません。きつと、つれて行けるくふうはしますよ。わたしのいいなづけは、王女さまのねまに通じている、ほそい、うらばしごをしつていますし、そのかぎのあるところもしつているのですからね。」

そこで、からすとゲルダとは、お庭をぬけて、木の葉があとからあとからと、ちつてくる並木道なみきみちを通りました。そして、お城のあかりが、じゅんじゅんにきえてしまったとき、からすはすこしあいているうらの戸口へ、ゲルダをつれていきました。

まあ、ゲルダのむねは、こわかったり、うれしかったりで、なんてどきどきしたことでしょう。まるでゲルダは、なにかわるいことでもしているような気がしました。けれど、ゲルダはその人が、カイちゃんであるかどうかをしりたい、いつしんな

のです。そうです。それはきつと、カイちゃんにちがいありません。ゲルダは、しみじみとカイちゃんのようにこうそうな目つきや、長いかみの毛をおもいだしてました。そして、ふたりがうちにいて、ばらの花のあいだにすわってあそんだとき、カイちゃんがわらったとおりの笑顔えがおが、目にうかびました。そこで、カイちゃんにあつて、ながいながい道中をして自分をさがしにやってきたことをきき、あれなりかえらないので、どんなにみんなが、かなしんでいるかしつたなら、こうしてきてくれたことを、どんなによろこぶでしょう。まあ、そうおもうと、うれしいし、しんぱいでした。

さて、からすとゲルダとは、かいだんの上ののぼりました。ちいさなランプが、たなの上についていました。そして、ゆか板のまん中のところには、飼いならされた女がらすが、じつとゲ

ルダを見て立っていました。ゲルダはおばあさまからおそわつたように、ていねいにおじぎしました。

「かわいいおじょうさん。わたしのいいなずけは、あなたのことを、たいそうほめておりました。」と、そのやさしいからすがいいました。「あなたのも、そのごけいれきとやらもうしますのは、ずいぶんおきのどくなのですね。さあ、ランプをおもちください。ごあんないしますわ。このところをまつすぐにまいりましょう。もうだれにもあいませんから。」

「だれか、わたしたちのあとから、ついてくるような気がするのとね。」と、なにかがそばをきゆうに通つたときに、ゲルダはいました。それは、たてがみをふりみだして、ほつそりとした足をもっている馬だの、それから、かりうどだの、馬にのつたりつばな男の人や、女の人だの、それがみんなかべにうつつ

たかげのように見えませんでした。

「あれは、ほんの夢なのですわ。」と、からすがいいました。「あれらは、それぞれのご主人たちのところを、りょうにさそいだそうとしてくるのです。つごうのいいことに、あなたは、ねどこの中であのひとたちのお休みのところがよくみられます。そこで、どうか、あなたがりっぱな身分におなりになったのちも、せわになつたおれいはい、おわすれなくね。」

「それはいうまでもないことだろうよ。」と、森のからすがいいました。

さて、からすとゲルダとは、一ばんはじめの広間にはいつていきました。そこのかべには、花でかざつた、ばら色のしゆすが、上から下まで、はりつめられていました。そして、ここにもりょうにさそうさつききの夢は、もうとんで来ていましたが、

あまりはやくうごきすぎて、ゲルダはえらいとの殿さまや貴婦人きふじん方を、こんどはみることができませんでした。ひろまから、ひろまへ行くほど、みどとにできていました。ただもうあまりのうつくしさに、まごつくばかりでしたが、そのうち、とうとうねままではいっていきました。そのてんじようは、高価なガラスの葉をひろげた、大きなしゆろの木のかたちになっていました。そして、へやのまんなかには、ふたつのベッドが、木のじくにあたる金のふとい柱につりさがつていて、ふたつとも、ゆりの花のようにみえました。そのベッドはひとつは白くて、それには王女がねむっていました。もうひとつのは赤くて、そこにねむっている人こそ、ゲルダのさがすカイちゃんではなくてはならないのです。ゲルダは赤い花びらをひとひら、そつとどけると、そこに日やけしたくびすじが見えました。——ああ、そ

これはカイちゃんでした。

——ゲルダは、カイちゃんの名をこえ高くよびました。ランプをカイちゃんのほうへさしだしました。……夢がまた馬にのつて、さわがしくそのへやの中へ、はいつてきました。……その人は目をさまして、顔をこちらにむけました。ところが、それはカイちゃんではなかったのです。

いまは王子となったその人は、ただ、くびすじのところ、カイちゃんににっていただけでした。でもその王子はわかなくて、うつくしい顔をしていました。王女は白いゆりの花ともみえるベッドから、目をぱちくりやつて見あげながら、たれがそこにきたのかと、おたずねになりました。そこでゲルダは泣いて、いままでのことや、からすがいろいろにつくしてくれたことなどを、のこらず王子に話しました。

「それは、まあ、かわいいそうに。」と、王子と王女とがいました。そして、からすをおほめになり、じぶんたちはけっして、か
らすがしたことをおこりはしないが、二どとこんなことをして
くれるな、とおっしゃいました。それでも、からすたちは、ご
ほうびをいただくことになりました。

「おまえたちは、すきかつてに、そとをとびまわっているほう
がいいかい。」と、王女はたずねました。「それとも、宮中おか
かえのからすとして、台所のおあまりは、なんでもたべること
ができるし、そういうふうにして、いつまでもごてんにいたい
とおもうかい。」

そこで、二わのからすはおじぎをして、自分たちが、としを
とつてからのことをかんがえると、やはりごてんにおいていた
だきたいと、ねがいました。そして、

「だれしもいつていますように、さきへいつてこまらないように、したいものでございます。」と、いいました。

王子はそのとき、ベッドから出て、ゲルダをそれにねかせ、じぶんは、それなりねようとはしませんでした。ゲルダはちいさな手をくんで、「まあ、なんといい人や、いいからすたちだろ。」と、おもいました。それから、目をつぶつて、すやすやねむりました。すると、また夢がやってきて、こんどは天使のような人たちが、一だいのそりをひいてきました。その上には、カイちゃんの手まねきしていました。けれども、それはただの夢だったので、目をさますと、さつそくきえてしまいました。あくる日になると、ゲルダはあたまから、足のさきまで、絹やびろうどの着物でつつまれました。そしてこのままお城にとどまっついて、たのしくくらすようにとすすめられました。で

も、ゲルダはただ、ちいさな馬車と、それをひくうまと、ちいさな一そくの長ぐつがいただきとうございますと、いいました。それでもういちど、ひろい世界へ、カイちゃんをさがしに出ていきたいのです。

さて、ゲルダは長ぐつばかりでなく、マッフまでもらって、さつぱりと旅のしたくができました。いよいよでかけようというときに、げんかんには、じゆん金のあたらしい馬車が一だいとまりました。王子と王女の紋章が、星もんしやうのようにひかっついていました。ぎよしやや、べつとうや、おさきばらいが——そうです、おさきばらいまでが——金の冠かんむりをかぶってならんできました。王子と王女は、ごじぶんで、ゲルダをたすけて馬車にのらせ、ぶじにいつてくるようにおっしやいました。もういまはけつこんをすませた森のからすも、三マイルさきまで、みお

くりについてきました。このからすは、うしろむきにのつていられないというので、ゲルダのそばにすわっていました。めすのほうのからすは、羽根をばたばたやりながら、門のところにとまっています。おくつていかないわけは、あれからずつとごてんづとめで、たくさんにたべものをいただくせい、ひどく頭痛ずつうがしていたからです。その馬車のうちがわは、さとうビスケットでできていて、こしをかけるところは、くだものや、くるみのはいったし、ようが、パンでできていました。

「さよなら、さよなら。」と、王子と王女がさけびました。するとゲルダは泣きだしました。——からすもまた泣きました。——さて、馬車が三マイル先のところまできたとき、こんどはからすが、さよならをいいました。この上ないかなしいわかれでした。からすはその木の上にとびあがって、馬車がいよい

よ見えなくなるまで、黒いつばさを、ばたばたやっていました。馬車はお日さまのようにかがやきながら、どこまでもはしりつづけました。

第五のお話

おいはぎのこむすめ

雪の女王 SNEDRONNINGEN



それから、ゲルダのなかまは、くらい森の中を通つていきました。ところが、馬車の光は、たいまつのようにちらちらしていました。それが、おいはぎどもの目にとまって、がまんがならなくさせました。

「やあ、金だぞ、金だぞ。」と、おいはぎたちはさげんで、いちどにとびだしてきました。馬をおさえて、ぎよしや、べつとうから、おさきばらいまでころして、ゲルダを馬車からひきずりおろしました。

「こりやあ、たいそうふとつて、かわいらしいむすめだわい。きつと、年中くるみの実ばかりたべていたのだろう。」と、おいはぎばがいました。女のくせに、ながい、こわいひげをはやして、まゆげが、目の上までたれさがったばあさんでした。「なにしろそっくり、あぶらののつた、こひつじというところだ

が、さあたべたら、どんな味がするかな。」

そういつて、ばあさんは、ぴかぴかするナイフをもちだしました。きれそうにひかつて、きみのわるいといったらありません。

「あッ。」

そのとたん、ばあさんはこえをあげました。その女のせなかにぶらさがっていた、こむすめが、なにしろらんぼうなただつ子で、おもしろがつて、いきなり、母親の耳をかんだのです。

「このあまあ、なによをする。」と、母親はさげびました。おかげで、ゲルダをころす、はなさきをおられました。

「あの子は、あたいといつしよにあそぶのだよ。」と、おいはぎのこむすめは、いいました。

「あの子はマッフや、きれいな着物をあたいにくれて、晩には

いつしよにねるのだよ。」

こういつて、その女の子は、もういちど、母親の耳をしたたかにかみました。それで、ばあさんはとびあがつて、ぐるぐるまわりしました。おいはぎどもは、みんなわらつて、

「見ろ、ばああが、がきといつしよにおどっているからよ。」と、いいました。

「馬車の中へはいつてみようや。」と、おいはぎのこむすめはいいました。

このむすめは、わんぱくにそだつて、おまけにごうじょうつぱりでしたから、なんでもしたいとおもうことをしなければ、気がすみませんでした。それで、ゲルダとふたり馬車にのりこんで、きりかぶや、石のでている上を通つて、林のおくへ、ふかくはいつていきました。おいはぎのこむすめは、ちようどゲ

ルダぐらいの大きさでしたが、ずっと、きつそうで、肩つきが
がっしりしていました。どす黒いぐろはだをして、その目はまっ黒
で、なんだかかなしそうに見えました。女の子は、ゲルダのこ
しのまわりに手をかけて、

「あたい、おまえとけんかしないうちには、あんなやつらに、お
まえをころさせやしないことよ。おまえはどこかの王女じゃな
くて。」と、いいました。

「いいえ、わたしは王女ではありません。」と、ゲルダはこたえ
て、いままでにあつたできごとや、じぶんがどんなに、すきなカ
イちゃんのことを思っているか、ということなどを話しました。

おいはぎのむすめは、しげしげとゲルダを見て、かるくうな
ずきながら、

「あたいは、おまえとけんかしたって、あのやつらに、おまえ

をころさせやしないよ。そんなくらいなら、あたい、じぶんでおまえをころしてしまおうわ。」と、いいました。

それからむすめは、ゲルダの目をふいてやり、両手をうつくしいマツフにつけてみましたが、それはたいへん、ふつくりして、やわらかでした。

さあ、馬車はとまりました。そこはおいはぎのこもる、お城のひろ庭でした。その山塞さんさいは、上から下までひびだらけでした。そのずれたわれ目から、大がらす小がらすがとびまわっています。大きなブルドッグが、あいてかまわず、にんげんでもくつてしまいそうなようすで、高くとびあがりました。でも、けつしてほえませんでした。ほえることはとめられてあつたからです。

大きな、すす煤けたひろまには、煙がもうもうしていて、たき火が、

赤あかと石だたみのゆか上でもえていました。煙はてんじょうの下にたちまよつて、どこからともなくでていきました。大きなおなべには、スープがにえたつて、大うさぎ小うさぎが、あぶりぐしにさして、やかれていました。

「おまえは、こん夜は、あたいや、あたいのちいさなどうぶつといつしよにねるのよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

ふたりはたべものと、のみものをもらうと、わらや、しきものがしいてある、へやのすみのほうへ行きました。その上には、百ばよりも、もつとたくさんのはとが、ねむったように、木摺きずりや、とまり木にとまっています。ふたりの女の子がきたときには、ちよつとこちらをむきました。

「みんな、このはと、あたいのものなのよ。」と、おいはぎのこむすめはいつて、てばやく、てぢかにいた一わをつかまえて、足

をゆすぶつたので、はとは、羽根をばたばたやりました。

「せつぷんしておやりよ。」と、いつて、おいはぎのこむすめは、それを、ゲルダの顔になげつけました。

「あすこにとまつているのが、森のあばれものさ。」と、そのむすめは、かべにあけたあなに、うちこまれたとまり木を、ゆびさしながら、また話しつづけました。「あれは二わとも森のあばれものさ。しつかり、とじこめておかないと、すぐにげていつてしまうの。ここにるのが、昔からおともだちのべーよ。」

こういつて、女の子は、ぴかぴかみがいた、銅どうのくびわをはめたままつながれている、一ぴきのとなかいを、一つのをもつてひきだしました。

「これも、しつかりつないでおかないと、にげていつてしまうの。だから、あたいはね、まい晩よくきれるナイフで、くびのと

ころをくすぐつてやるんだよ。すると、それはびつくりするつたらありやしない。」

そういいながら、女の子はかべのわれめのところから、ながいナイフをとりだして、それをとなかいのくびにあてて、そろそろなでました。かわいいそうに、そのけものは、足をどんどんやつて、苦しがりました。むすめは、おもしろそうにわらつて、それなりゲルダをつれて、ねどこに行きました。

「あなたはねているあいだ、ナイフをはなさないの。」と、ゲルダは、きみわるそうに、それをみました。

「わたい、しよつちゆうナイフをもっているよ。」と、おいはぎのこむすめはこたえました。

「なにがはじまるかわからないからね。それよか、もういちどカイちゃんつて子の話をしてくれない、それから、どうしてこ

のひろい世界に、あてもなくでてきたのか、そのわけを話してくれないか。」

そこで、ゲルダははじめから、それをくりかえしました。森のはとが、頭の上のかごの中でくうくういつていました。ほかのはとはねむっていました。おいはぎのこむすめは、かた手をゲルダのくびにかけて、かた手にはナイフをもったまま、大いびきをかいてねてしまいました。けれども、ゲルダは、目をつぶることもできませんでした。ゲルダは、いつたい、じぶんは生かしておかれるのか、ころされるのか、まるでわかりませんでした。

たき火のぐるりをかこんで、おいはぎたちは、お酒をのんだり、歌をうたったりしていました。そのなかで、ばあさんがとんぼをきりました。ちいさな女の子にとっては、そのありさま

を見るだけで、こわいことでした。

そのとき、森のはとが、こういいました。

「くう、くう、わたしたち、カイちゃんを見ましたよ。一わの白いめんどりが、カイちゃんのそりをはこんでいました。カイちゃんは雪の女王のそりにのって、わたしたちが、巣にねていると、森のすぐ上を通っていったのですよ。雪の女王は、わたしたち子ばとに、つめたいいきをふきかけて、ころしてしまいました。たすかったのは、わたしたち二わだけ、くう、くう。」

「まあ、なにをそこでいってるの。」と、ゲルダが、つい大きなこえをしました。「その雪の女王さまは、どこへいったのですでしょうね。そのさきのこと、なにかしつていて。おしえてよ。」

「たぶん、*ラップランドのほうへいったのでしょうよ。そこには、年中、氷や雪がありますからね。まあ、つながれている、

となかいに、きいてごらんなさい。」

*ヨーロッパ洲の極北、スカンジナビア半島の北東部、四〇万平方キロ一帯の寒い土地。遊牧民のラップ人がすむ。

すると、となかいがひきとつて、

「そこには年中、氷や雪があつて、それはすばらしいみごとなものですよ。」といいました。

「そこでは大きな、きらきら光る谷まを、自由にはしりまわることができすし、雪の女王は、そこに夏のテントをもつています。でも女王のりっぱな本城は、もつと北極ほんじょうのほうの、*スピッツベルゲンという島の上にあるのです。」

*ノルウエーのはるか北、北極海にちかい小島群（一名スヴァバルド）。

「ああ、カイちゃんは、すきなカイちゃんは。」と、ゲルダはためいきをつきました。

「しずかにしなよ。しないと、ナイフをからだにつきさすよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

あさになって、ゲルダは、森のはとが話したことを、すっかりおいはぎのこむすめに話しました。するとむすめは、たいそううまじめになって、うなずきながら、

「まあいいや。どつちにしてもおなじことだ。」と、いました。そして、

「おまえ、ラップランドって、どこにあるのかしってるのかい。」と、むすめは、となかいにたずねました。

「わたしほど、それをよくしっているものがございましたらどうか。」と、目をかがやかしながら、となかいがこたえました。「わたし

はそこで生まれて、そだったのです。わたしはそこで、雪の野原を、はしりまわっていました。」

「ごらん。みんなでかけていってしまふだろう。おつかさんだけがあちにいる。おつかさんは、ずっとうちへのこっているのよ。でもおひるちかくなると、大きなびんからお酒をのんで、すこしのあいだ、ひるねするから、そのとき、おまえにいいことをしてあげようよ。」と、おいはぎのこむすめはゲルダにいいました。

それから女の子は、ぱんと、ねどこからはねおきて、おつかさんのくびのまわりにかじりついて、おつかさんのひげをひっぱりながら、こういいました。

「かわいい、めやぎさん、おはようございます。」

すると、おつかさんは、女の子のはなが赤くなったり紫色に

なつたりするまで、ゆびではじきました。

でもこれは、かわいくてたまらない心からすることでした。

おつかさんが、びんのお酒をのんで、ねてしまったとき、おいはぎのこむすめは、となかいのところへいつて、こういいました。

「わたしはもつと、なんべんも、なんべんも、ナイフでおまえを、くすぐつてやりたいのだよ。だって、ずいぶんおかしいんだもの、でも、もういいさ。あたい、おまえがラップランドへ行けるように、つなをほどいてにがしてやろう。けれど、おまえはせつせとはしつて、この子を、この子のおともだちのいる、雪の女王のごてんへ、つれていかなければいけないよ。おまえ、この子があたいに話していたこと、きいていたろう。とても大きなこえで話したし、おまえも耳をすまして、きいていたのだ

から。」

となかいはよろこんで、高くはねあがりました。その背中においはぎのこむすめは、ゲルダをのせてやりました。そして用心ようじんぶかく、ゲルダをしつかりいわえつけて、その上、くらのかわりに、ちいさなふとんまで、しいてやりました。

「まあ、どうでもいいや。」と、こむすめはいいました。「そら、おまえの毛皮のながぐつだよ。だんだんさむくなるからね。マツフはきれいだからもらっておくわ。けれど、おまえにさむいおもいはさせないわ。ほら、おつかさんの大きなまる手ぶくろがある。おまえなら、ひじのところまで、ちようどとどくだろう。まあ、これをはめると、おまえの手が、まるであたいのいやなおつかさんの手のようだよ。」と、むすめはいいました。

ゲルダは、もううれしくて、なみだ涙がこぼれました。

「泣くなんて、いやなことだね。」と、おいはぎのこむすめはいました。「ほんとは、うれしいはずじゃないの。さあ、ここにふたつ、パンのかたまりと、ハムがあるわ。これだけあれば、ひもじいおもいはしないだろう。」

これらの品じなは、となかいの背中の上しろにいわえつけられました。おいはぎのこむすめは戸をあけて、大きな犬をだまして、中にいれておいて、それから、よくきれるナイフでつなをきると、となかいにむかつていいました。

「さあ、はしつて。そのかわり、その子に、よく気をつけてやってよ。」

そのとき、ゲルダは、大きなまる手ぶくろをはめた両手を、おいはぎのこむすめのほうにさしのばして、「さようなら。」といいました。

とたんに、となかいはかけだしました。木の根、岩かどをとびこえ、大きな森をつきぬけて、沼地や草原もかまわず、いっしょうけんめい、まっしぐらにはしつていきました。おおかみがほえ、わたりがらすがこえをたてました。ひゅッ、ひゅッ、空で、なにか音がしました。それはまるで花火があがったように。「あれがわたしのなつかしい北極光です。」と、となかいはいいました。「ごらんなきい。なんてよく、かがやいているでしょう。」

それからとなかいは、ひるも夜も、前よりももつとはやくはしつて行きました。

パンのかたまりもなくなりました。ハムもたべつくしました。となかいはゲルダとは、ラップランドにつきましました。

第六のお話

ラップランドの女とフィンランドの女

雪の女王 SNEDRONNINGEN



ちいさな、そまつなこやの前で、となかいはとまりました。そのこやはたいそうみすばらしくて、屋根は地面とすれすれのところまでも、おおいかぶさっていました。そして、戸口がたいそうひくくついているものですから、うちの人が出たり、はいったりするときには、はらばいになって、そこをくぐらなければなりませんでした。その家には、たったひとり年とつたラツブランドの女がいて、鯨油ランプのそばで、おさかなをやいていました。となかいはそのおばあさんに、ゲルダのことをすつかり話してきかせました。でも、その前にじぶんのことをまず話しました。となかいは、じぶんの話のほうか、ゲルダの話よりたいせつだとおもったからでした。

ゲルダはさむさに、ひどくやられていて、口をきくことができませんでした。

「やれやれ、それはかわいいそうに。」と、ラップランドの女はいました。「おまえたちはまだまだ、ずいぶんとおくはしつて行かなければならないよ。百マイル以上も北の*フィンマルケンのおくふかくはいらなければならぬのだよ。雪の女王はそこにおいて、まい晩、青い光を出す花火をもやしているのさ。わたしは紙をもっていないから、干鱈ひだらのうえに、てがみをかいてあげよう。これをフィンランドの女のところへもつておいで。その女のほうが、わたしよりもくわしく、なんでも教えてくれるだろうからね。」

*ノルウェーの北端、最低地方。

さてゲルダのからだもあたたまり、たべものやのみものでけんきをつけてもらったとき、ラップランドの女は、干鱈ひだらに、ふたことみこと、もんくをかきつけて、それをたいせつにもつて

いくように、といつてだしました。ゲルダは、またとなくいに
いわえつけられてでかけました。ひゅッひゅッ、空の上でまた
いいました。ひと晩中、この上もなくうつくしい青色をした、
極光オーロラがもえていました。——さて、こうして、となくいとゲル
ダとは、フィンマルケンにつきました。そして、フィンランド
の女の家のえんとつを、こつこつたたきました。だつてその家
には、戸口もついていませんでした。

家の中は、たいへんあついで、その女の人は、まるでだ
か同様でした。せいのひくいむさくるしいようすの女でした。
女はすぐに、ゲルダの着物や、手ぶくろや、ながぐつをぬがせ
ました。そうしなければ、とてもあつくて、そこにはいられな
かったからです。それから、となくいのあたまの上に、ひとか
け、氷のかたまりを、のせてやりました。そして、ひだらにか

きつけてあるもんくを、三べんもくりかえしてよみました。そしてすっかりおぼえこんでしまうと、スープをこしらえる大なべの中へ、たらをなげこみました。そのたらはたべることができたからで、この女の人は、けっしてどんなものでも、むだにはしませんでした。

さて、となかいは、まずじぶんのことを話して、それからゲルダのことを話しました。するとフィンランドの女は、そのりこうそうな目をしばたいたただけで、なにもいいませんでした。「あなたは、たいそう、かしこくていらつしやいますね。」と、となかいは、いいました。「わたしはあなたが、いつぽんのより糸で、世界中の風をつなぐことがおできになると、きいております。もしも舟のりが、そのいちばんはじめのむすびめをほどくなら、つごうのいい追風がふきます。二ばんめのむすびめ

だつたら、つよい風がふきます。三ばんめと四ばんめをほどこなら、森ごとふきたおすほどのあらしがふきすさみます。どうか、このむすめさんに、十二人りきがついて、しゅびよく雪の女王にかてますよう、のみものをひとつ、つくつてやっていただけませんか。」

「十二人りきかい。さぞ役にたつ三だろうよ。」と、フィンランド^三の女はくりかえしていいました。

それから女の人は、たなのところへいつて、大きな毛皮のまいたものをもつてきてひろげました。それには、ふしぎなもんじがかいてありましたが、フィンランドの女は、ひたいから、あせがたれるまで、それをよみかえしました。

でも、となかいは、かわいいゲルダのために、またいっしょうけんめい、その女の人にたのみました。ゲルダも目に涙をいっ

ぱいためて、おがむように、フィンランドの女を見あげました。女はまた目をしばたたきはじめました。そして、となかいをすみのほうへつれていって、そのあたまにあたらしい氷をのせてやりながら、こうつぶやきました。

「カイって子は、ほんとうに雪の女王のお城にいるのだよ。そして、そこにあるものはなんでも気にいってしまつて、世界にこんないいところはないとおもっているんだよ。けれどそれと、いうのも、あれの目のなかには、鏡のかけらがはいっているし、しんぞうのなかにだつて、ちいさなかけらがいっているからなのだよ。だからそんなものを、カイからとりだしてしまわないうちは、あれはけつしてまにんげんになることはできないし、いつまでも雪の女王のいうなりになっていることだろうよ。」

「では、どんなものにも、うちかつことのできる力になるよう

なものを、ゲルダちゃんにくださるわけにはいかないでしょうか。」

「このむすめに、生まれついてもっている力よりも、大きな力をさずけることは、わたしにはできないことなのだよ。まあ、それはおまえさんにも、あのむすめがいまもっている力が、どんなに大きな力だかわかるだろう。ごらん、どんなにして、いろいろと人間やどうぶつが、あのむすめひとりのためにしてやっているか、どんなにして、はだしのくせに、あのむすめがよくもこんなとおくまでやってこられたか。それだもの、あのむすめは、わたしたちから、力をえようとしてもだめなのだよ。それはあのむすめの心のなかにあるのだよ。それがかわいいむじやきなこどもだということにあるのだよ。もし、あのむすめが、自分で雪の女王のところへ、でかけていって、カイからガラス

のかけらをとりだすことができないうのなら、まして、わたしたちの力におよばないことさ。もうここから二マイルばかりで、雪の女王のお庭の入口になるから、おまえはそこまで、あの女の子をはこんでいって、雪の中で、赤い実みをつけてしげつている、大きな木やぶのところにおろしてくるがいい。それで、もうよいいな口をきかないで、さつきとかえつておいで。」

こういって、フィンランドの女は、ゲルダを、となかいのせなかにのせました。そこで、となかいは、ぜんそくりよくで、はしりだしました。

「ああ、あたしは、長ぐつをおいてきたわ。手ぶくろもおいてきてしまった。」と、ゲルダはさげびました。

とたんに、ゲルダは身をきるようなさむさをかんじました。でも、となかいはけつしてとまろうとはしませんでした。それ

は赤い実みのなつた木やぶのところへくるまで、いつさんばしりに、はしりつづけました。そして、そこでゲルダをおろして、くちのところ^みにせつぷんしました。

大つぶの涙が、となかいの頬ほおを流れました。それから、となかいはまた、いつさんばしりに、はしって行ってしまいました。かわいそうに、ゲルダは、くつもはかず、手ぶくろもはめずに、氷にとじられた、さびしいフィンマルケンのまっただなかに、ひとりどりのこされて立っていました。

ゲルダは、いっしょうけんめいかげだしました。すると、雪の大軍が、むこうからおしよせてきました。

けれど、その雪は、空からふってくるのではありません。空オーロラは極光オーロラにてらされて、きらきらかがやいていました。雪は地面の上をまっすぐに走ってきて、ちかくにくればくるほど、形が

大きくなりました。ゲルダは、いつか虫めがねでのぞいたとき、雪のひとひらがどんなにか大きくみえたことを、まだおぼえていました。けれども、ここの雪はほんとうに、ずっと大きく、ずっとおそろしくみえました。この雪は生きていました。それは雪の女王の前哨ぜんしやうでした。そして、ずいぶんへんてこな形をしていました。大きくてみにくい、やまあらしのようなものもあれば、かまくびをもたげて、とぐろをまいているへびのようなかつこうのもあり、毛のさかさにはえた、ふとつた小ぐまに似たものもありました。それはみんなまぶしいように、ぎらぎら白くひかりました。これこそ生きた雪の大軍でした。

そこでゲルダは、いつもの主しゅの祈の「われらの父」をとなえました。さむさはとてもひどくて、ゲルダはじぶんのつくいきを見ることができず、それは、口からけむりのようにたち

のぼりました。そのいきはだんだんこくなって、やがてちいさい、きゃしゃな天使になりました。それが地びたにつくといいしよに、どんどん大きくなりました。天使たちはみな、かしらにはかぶとをいただき、手には楯たてとやりをもっていました。天使の数はだんだんふえるばかりでした。そして、ゲルダが主のおいのりをおわつたときには、りっぱな天使軍の一たいが、ゲルダのぐるりをとりまいていました。天使たちはやりをふるつて、おそろしい雪のへいたいをうちたおすと、みんなちりぢりになってしまいました。そこでゲルダは、ゆうきをだして、げんきよく進んで行くことができました。天使たちは、ゲルダの手と足をさすりました。するとゲルダは、前ほどさむさを感じなくなつて、雪の女王のお城をめがけていそぎました。

ところで、カイは、あののち、どうしていたでしょう。それ

からまずお話をすすめましょう。カイは、まるでゲルダのことなど、おもってはいませんでした。だから、ゲルダが、雪の女王のごてんまできているなんて、どうして、ゆめにもおもわないことでした。

第七のお話

雪の女王のお城のできごとと
そののちのお話

雪の女王 SNEDRONNINGEN



雪の女王のお城は、はげしくふきたまる雪が、そのままかべになり、窓や戸口は、身をきるような風で、できていました。そこには、百いじょうの広間が、じゅんにならんでいました。それはみんな雪のふきたまったものでした。いちばん大きな広間はなんマイルにもわたっていました。つよい極光オーロラがこの広間をもてらして、それはただもう、ばか大きく、がらんとして、いかに氷のようにつめたく、ぎらぎらして見えました。たのしみというものの、まるでないところでした。あらしが音楽をかなでて、ほつきよくぐまがあと足で立ちあがって、気どつておどるダンスの会もみられません。わかい白ぎつねの貴婦人きふじんのあいだに、ささやかなお茶ちやの会かいがひらかれることもありません。雪の女王の広間は、ただもうがらんとして、だだっぴろく、そしてさむいばかりでした。極光のもえるのは、まことにきそ

く正しいので、いつがいちばん高いか、いつがいちばんひくい
か、はつきり見ることができました。このはてしなく大きなが
らんとした雪の広間のまん中に、なん千万という数のかけらに
われてこおった、みずうみがありました。われたかけらは、ひ
とつひとつおなじ形をして、これがあつまつて^四、りっぱな美術
品になっていました。このみずうみのまん中に、お城にいると
き、雪の女王はすわっていました。そしてじぶんは理性^{りせい}の鏡の
なかにすわっているのだ^五、この鏡ほどのものは、世界中さがし
てもない、といっていました。

カイはここにいて、さむさのため、まつ青に、というよりは、
うす黒くなっていました。それでいて、カイはさむさを感じま
せんでした。というよりは、雪の女王がせつぶんして、カイのか
らだから、さむさをすいとおつてしまったからです。そしてカイ

のしんぞうは、氷のようになっていました。カイは、たいらな、いく枚かのうすい氷の板を、あっちこっちからはこんできて、いろいろにそれをくみあわせて、なにかつくろうとしていました。まるでわたしたちが、むずかしい漢字をくみ合わせるようでした。カイも、この上なく手のこんだ、みごとな形をつくりあげました。それは氷のちえあそびでした。カイの目には、これらのものの形はこのうえなくりっぱな、この世の中で一ばん六たいせつなもののようにみえました。それはカイの目にささつた鏡のかけらのせいでした。カイは、形でひとつのことばをかきあらわそうとおもって、のこらずの氷の板をならべてみましたが、自分があらわしたいとおもうことば、すなわち、「永遠えいえん」ということばを、どうしてもつくりだすことはできませんでした。でも、女王はいつていました。

「もしおまえに、その形をつくることがわかれば、からだも自由になるよ。そうしたら、わたしは世界ぜんたいと、あたらしいそりぐつを、いつそくあげよう。」

けれども、カイには、それができませんでした。

「これから、わたしは、あたたかい国を、ぎつとひとまわりしてこよう。」と、雪の女王はいいました。「ついでにその黒なべをのぞいてくる。」黒なべというのは、*エトナとかヴェスヴィオとか、いろんな名の、火をはく山のことでした。「わたしはすこしばかり、それを白くしてやろう。ぶどうやレモンをおいしくするためにいいそうだから。」

*エトナはイタリア半島の南シシリー島の火山。ヴェスヴィオはおなじくナポリ市の東方にある火山。

こういつて、雪の女王は、とんでいつてしまいました。そし

てカイは、たつたひとりぼっちで、なんマイルというひろさのある、氷の大広間のなかで、氷の板を見つめて、じつと考えこんでいました。もう、こちこちになつて、おなかのなかの氷が、みしりみしりいうかとおもうほど、じつとうごかずにはいました。それをみたら、たれも、カイはこおりついたなり、死んでしまつたのだとおもつたかもしれませぬ。

ちやうどそのとき、ゲルダは大きな門を通つて、その大広間にはいつてきました。そこには、身をきるような風が、ふきすさんでいましたが、ゲルダが、ゆうべのおいのりをあげると、ねむつたように、しずかになつてしまいました。そして、ゲルダは、いくつも、いくつも、さむい、がらんとしたひろまをぬけて、——とうとう、カイをみつけました。ゲルダは、カイをおぼえていました。で、いきなりカイのくびすじにとびついて、

しつかりだきしめながら、

「カイ、すきなカイ。ああ、あたしとうとう、みつけたわ。」と、さげびました。

けれども、カイは身ゆるぎもせず、じつとしゃちほこばつたなり、つめたくなっていました。そこで、ゲルダは、あついで涙を流して泣きました。それはカイのむねの上におちて、しんぞうのなかにまで、しみこんで行きました。そこにたまった氷をとかして、しんぞうの中の、鏡のかけらをなくなしてしまいました。カイは、ゲルダをみました。ゲルダはうたいました。

ばらのはな　さきてはちりぬ

おさな子エス　やがてあおがん

すると、カイはわつと泣きだしました。カイが、あまりひどく泣いたものですから、ガラスのとげが、目からぼろりとぬけてでてしまいました。すぐとカイは、ゲルダがわかりました。そして、大よろこびで、こえをあげました。

「やあ、ゲルダちゃん、すきなゲルダちゃん。——いままでどこへいったの、そしてまた、ぼくはどこにいたんだろう。」こういって、カイは、そこらを見まわしました。「ここは、ずいぶんさむいんだなあ。なんて大きくて、がらんとしているんだろうなあ。」

こういって、カイは、ゲルダに、ひしととりつきました。ゲルダは、うれしまぎれに、泣いたり、わらったりしました。それがあまりたのしそうなので、氷の板きれまでが、はしやいでおどりだしました。そして、おどりつかれてたおれてしまいま

した。そのたおれた形が、ひとりでに、ことばをつづつていました。それは、もしカイに、そのことばがつづれたら、カイは自由になれるし、そしてあたらしいそりぐつと、のこらずの世界をやろうと、雪の女王がいった、そのことばでした。

ゲルダは、カイのほおにせつぷんしました。みるみるそれはほおつと赤くなりました。それからカイの目にもせつぷんしました。すると、それはゲルダの目のように、かがやきだしました。カイの手だの足だのにもせつぷんしました。これで、すっかりしてげんきになりました。もうこうなれば、雪の女王がかえつてきても、かまいません。だって、女王が、それができればゆるしてやるといったことばが、ぴかぴかひかる氷のもんじで、はつきりとそこにかかれていたからです。

さて、そこでふたりは手をとりあつて、その大きなお城から

そとへでました。そして、うちのおばあさんの話だの、屋根の上のばらのことなどを、語りあいました。ふたりが行くさきぎきには、風もふかず、お日さまの光がかがやきだしました。そして、赤い実みのなつた、あの木やぶのあるところに来たとき、そこにもう、となかいがいて、ふたりをまつていました。そのとなかいは、もう一ぴきのわかいとなかいをつれていました。そして、このわかいほうは、ふくれた乳ぶさからふたりのこどもたちに、あたたかいおちちを出してのませてくれて、そのくちの上に乗せつぷんしました。それから二ひきのとなかいは、カイとゲルダをのせて、まずフィンランドの女のところへ行きました。そこでふたりは、あのあついへやで、じゅうぶんからだをあたたためて、うちへかえる道をおしえてもらいました。それからこんどは、ラップランドの女のところへいきました。その女

は、ふたりにあたらしい着物をつくってくれたり、そりをそろえてくれたりしました。

となかいと、もう一ぴきのとなかいは、それなり、ふたりのそりについてはしつて、くにぎょかい国境までおくつてきてくれました。ここでは、はじめて草の緑がセもえだしていました。カイとゲルダとは、ここで、二ひきのとなかいと、ラップランドの女とにわかれました。

「さようなら。」と、みんなはいいました。そして、はじめて、小鳥がさえずりだしました。森には、緑の草の芽が、いっぱいにふいていました。

その森の中から、うつくしい馬にのった、わかいむすめが、赤いぴかぴかするぼうしをかぶり、くらにピストルを二ちようさして、こちらにやってきました。ゲルダはその馬をしつていま

した。(それは、ゲルダの金の馬車きんをひっぱった馬であったからです。)そして、このむすめは、れいのおいはぎのこむすめでした。この女の子は、もう、うちにいるのがいやになって、北の国のほうへいつてみたいとおもっていました。そしてもし、北の国が気にいらなかったら、どこかほかの国へいつてみたいとおもっていました。このむすめは、すぐにゲルダに気がつきました。ゲルダもまた、このむすめをみつけました。そして、もういちどあえたことを、心からよろこびました。

「おまえさん、ぶらつきやのほうでは、たいしたおやぶんさんだよ。」と、そのむすめは、カイにいました。「おまえさんのために、世界のはてまでもさがしにいつてやるだけのねうちが、いつたい、あつたのかしら。」

けれども、ゲルダは、そのむすめのほおを、かるくさすりな

がら、王子と王女とは、あののちどうなつたかとききました。

「あの人たちは、外国へいつてしまつたのさ。」と、おいはぎのこむすめがこたえました。

「それで、からすはどうして。」と、ゲルダはたずねました。

「ああ、からすは死んでしまつたよ。」と、むすめがいました。

「それで、おかみさんがらすも、やもめになつて、黒い毛糸の喪章もしようを足につけてね、ないてばかりいるつていうけれど、うわさだけだろう。さあ、こんどは、あれからどんな旅をしたか、どうしてカイちゃんをつかまえたか、話しておくれ。」

そこで、カイとゲルダとは、かわりあつて、のこらずの話をしました。

「そこで、よろしく、ちんがらもんがらか、でも、まあうまくいつて、よかつたわ。」と、むすめはいいました。

雪の女王 SNEDRONNINGEN



そして、ふたりの手をとって、もしふたりのすんでいる町を通ることがあつたら、きつとたずねようと、やくそくしました。それから、むすめは馬をとばして、ひろい世界へでて行きました。でも、カイとゲルダとは、手をとりあつて、あるいていきました。いくほど、そこらが春めいてきて、花がさいて、青葉がしげりました。お寺の鐘かねがきこえて、おなじみの高い塔とうと、大きな町が見えてきました。それこそ、ふたりがすんでいた町でした。そこでふたりは、おばあさまの家の戸口へいって、かいだんをあがって、へやへはいました。そこではなにもかも、せんとかわつていませんでした。柱どけいが「カッチンカッチン」いって、針がまわっていました。けれど、その戸口をはいるとき、じぶんたちが、いつかもうおとなになつていふことに気がつきました。おもての屋根やねの上では、ばらの花がさ

いて、ひらいた窓から、うちのなかをのぞきこんでいました。そしてそこには、こどものいすがおいてありました。カイとゲルダとは、めいめいのいすにこしをかけて、手をにぎりあいました。ふたりはもう、あの雪の女王のお城のさむい、がらんとした、そうごんなけしきを、ただぼんやりと、おもくるしい夢のようにおもっていました。おばあさまは、神さまの、うららかなお日さまの光をあびながら、「なんじら、もし、おさなごのごとくならずば、天国にいることをえじ。」と、高らかに聖書せいしよの一せつをよんでいました。

カイとゲルダとは、おたがい、目と目を見あわせました。そして、

ばらのはな さきてはちりぬ

おさな子エスやがてあおがん

というさんび歌のいみが、にわかにはつきりとわかつてきました。

こうしてふたりは、からだこそ大きくなっても、やはりこどもで、心だけはこどものままで、そこにこしをかけていました。ちようど夏でした。あたたかい、みめぐみあふれる夏でした。

後註

- 一 「とかないを、」に傍点
- 二 「たつ」は底本では「たっ」

- 三 「フィンランド」は底本では「フライランド」
- 四 「あつまって」は底本では「あつまつて」
- 五 「いるのだ」は底本では「い のだ」
- 六 「ぼん」は底本では「ぼん」
- 七 「が」は底本では「か」

底本：「新訳アンデルセン童話集 第二巻」同和春秋社

1955（昭和 30）年 7 月 15 日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

※見出しの字下げは底本通りとしました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005 年 11 月 22 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。